

技術とともに おみこし 御神輿文化を守り伝える



株式会社谷尾

昔の姿のまとお返し

創業、明治44年。御神輿（おみこし）を中心とした祭祀具の修復や制作を手がける谷尾。創業者は、塗り職人であり、木工職人でもあった、谷尾桂一社長の曾祖父。当初は人形の制作を手がけており、そこから次第に、優勝旗や校旗等、旗や幟の制作に移行。これらの制作は現在も続いている。

御神輿の修復を手がけるようになってからは、谷尾社長代になつてから。知り合いから、古くなった御神輿の修復を依頼されたことがきっかけだった。「初めは無理だと思った」と話す谷尾社長。それでも、御神輿を「開ける」（解体すること）で構造を知り、勉強しながら修復をした。ひと口に御神輿といっても、大阪型・京都型・江戸型で大きく分かれ、さらに制作された年代によってもそれぞれ作り方が異なる。現在でも引き取ってきた御神輿はまず職人全員で「開けて」構造を見極めることから始めている。

木を組み、ニカワでつなぎ、漆を塗る——御神輿の製法は昔から変わ



らない。安易にねじで固定しては弾性が失われ、担ぐ際の負荷で破損し、ペンキを塗ってしまったと、漆よりも早く剥がれ落ちるのだ。「受け継ぐべきはその精神。御神輿という文化を壊してはいけない。昔の姿のままお返しすることに責任があり、一挺一挺、丁寧に扱い、後世に残していかなければならない」と語る。修復を依頼された背景には、御神輿職人の減少があるが、それも「時代が私にさせてくれたと思っている」と振り返る。

工場開放で技術を広める

一挺の御神輿の修復にかかる日数は、子ども御神輿で約6か月、大人の御神輿で約8か月。大きいものになると数年がかりの作業になる。一挺につき5〜6人で取り組み、装飾品も含めると延べ20以上の職種がかかわっている。実は新規で制作する方がずっと簡単で、期間も短いのだ。

谷尾では若い技術者に基本的な修復技術は教えるが、後々まで手とり足とり教えることはない。最初の御神輿修復がそうであったように、各技術者が現場で御神輿と向き合い、数をこなして体で覚えるのだ。一方で、常に工場を開放し様々な方の見学を受け入れている。決して技術を隠さず、むしろ広めることで業界の活性化を図ろうとしている。

御神輿文化の希少価値に着目

「岸和田祭や天神祭、祇園祭等、大きな祭は残るだろうが、地域の祭

が今後大きくなっていくとは考えにくい」——谷尾社長は、今後の社会状況の変遷に伴い、祭自体が衰退していく可能性を示唆する。高齢者ばかりでは「御神輿を出そう」とはなりにくいからだ。ただ、悲観はしていない。「だからこそ希少価値を見出し、職人を育てていき、御神輿修復の技術とともに御神輿文化も若い方々に継承していつてほしいと思う」とむしろ前向きだ。

「神事にかかわることで生まれる使命感」、それが谷尾の原動力となっている。

主な事業内容

御神輿の修復・制作・旗・幟・神具の制作



谷尾桂一さん
代表取締役

株式会社谷尾

Company Profile

住所 / 〒563-0341
大阪府豊能郡能勢町野1081-1
創業 / 明治44年1月
設立 / 平成2年6月
資本金 / 1,000万円
従業員 / 16名（平成21年1月現在）
TEL / 072-734-0310
FAX / 072-734-2095

大阪 19

<http://www.sairei-tanio.com/>